

第36回

現代の「クラシック」音楽 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（7）～



講師
沼野 雄 司

学習のねらい

「クラシック」音楽は、はるか昔に作曲された音楽と思うかもしれませんが、現在も新しい音の世界への模索を続けながら、「交響曲」などを作る作曲家は存在します。「新しさ」を求める過程は、必然的に「難しさ」をも呼び寄せます。これまで誰も聴いたこともない音楽を目指すのだから、当然といえるかもしれません。今回は、こうした現代の「クラシック」音楽について、多様な視点から学んでいきましょう。

調性や規則的なリズムの破壊について

20世紀の初頭に起こった新しい音楽のスタイルのひとつは、「無調」と呼ばれるものです。これはハ長調とかイ短調といった調性にとらわれず、自由に音を使おうとする試みです。絵画でいえば、人物や風景を描くのではなく、抽象的な色や形を描くようなものと言ったらよいでしょうか。そして実際に、無調の世界を最初に開拓したシェーンベルクと、抽象絵画の世界を最初に開拓したカンディンスキーは、お互いに頻繁に手紙をやりとりし、励まし合いながら、この新しい世界にとびこんでいきました。一方、音楽のリズムの側面でも20世紀初頭には大きな発展がありました。しばしばその代表的な例として挙げられるのが、ロシア出身のストラヴィンスキーが1913年に書いたバレエ音楽、「春の祭典」です。ここでストラヴィンスキーは、拍節的・規則的な音の運動を破壊し、大変に不規則でダイナミックなリズムを用いました。

新しい音の素材の探求

一方で、音の素材という点にもさまざまな探求が加えられました。とりわけ20世紀初頭に発展した電子技術を用いた、電気楽器・電子楽器は多くの作曲家の興味をひくこととなります。フランスに生まれ、のちにアメリカに帰化したヴァレーズは、全編にわたって電子的な手段で構成された斬新な作品「ポエム・エレクトロニク」を1958年のブリュッセルバンコク博覧会で発表しました。また、イタリアのペリオの代表作は、さまざまな楽器の独奏による「セクエンツァ」というシリーズですが、そのひとつに1966年に完成した女性一人の声による作品があります。歌い手にありとあらゆる声の出し方が要求されるという、超絶技巧の曲を作りました。

さまざまなタイプの「現代音楽」

現代の作曲家たちは「新しさ」を求めて、次々に新しい技法を編み出していきました。たとえば Cage による「不確定性の音楽」、Ligeti による「反復音楽（ミニマル・ミュージック）」などもその一例です。一方で、旧ソ連のような全体主義国家では新しい音楽の試みが許されず、作曲家たちは以前と同じような楽器編成や形式で楽曲を書かざるを得ませんでした。その一人が、1906年に生まれたショスタコーヴィチです。また、日本の作曲家である伊福部昭は、ほとんど独学で作曲を学び、日本の民謡や祭りの音楽などを取り入れた、ダイナミックな作品を数多く残しています。

♪ 今回取り上げる曲 ♪♪♪

- 「ピアノのための変奏曲 作品 27」
作曲：ヴェーベルン（オーストリア） 1936 年完成
- 「月に憑かれたピエロ」
作曲：シェーンベルク（オーストリア → アメリカ） 1912 年完成
- バレエ音楽「春の祭典」いけにえの踊り
作曲：ストラヴィンスキー（ロシア） 1913 年発表
- 「ポエム・エレクトロニック」
作曲：ヴァレーズ（フランス → アメリカ） 1958 年発表
- 「セクエンツァ 第3作」
作曲：ベリオ（イタリア） 1966 年完成
- 2台のピアノのための「ピアノ・フェイス」
作曲：ライヒ（アメリカ） 1967 年作曲
- 「交響曲第5番 第4楽章」
作曲：ショスタコーヴィチ（ソ連） 1937 年発表
- 「シンフォニア・タブカーラ 第3楽章」
作曲：伊福部昭（日本） 1954 年作曲 / 79 年改訂